

# 国民になり代わり・・・バルト海上空にて

1 まずは次の週刊誌記事(2011.6)をお読みください。

2019.10 浦山

## 週刊新潮

### ほろは着ていも

一昔前になる。熊本県水俣市で鉄砲水が出て19人が死んだ。

それを伝える共同通信の記事は「もつと捜して」の見出しで、「(身内がその辺に埋まっている。自衛隊員にもつと捜してと言っているのに」と視察に来た県知事に訴える被災者の言葉を取り上げている。

記事に添えられた写真は横隊で泥沼の中を遺体捜索に当たる自衛隊員を手前から中年の女性二人が手持無沙汰にしゃがんで見つめている図柄だ。

何とも違和感が残る。身内が埋もれているなら自分たちで探すのが家族というものだ。少なくとも日本人はそうしてきた。

そこに災害派遣の自衛隊員が来てくれた。語る言葉はまず「有難う」だろう。そしていっしょに泥沼を懸命に探す。

しかし共同の記事は違う。被災者はご主人様で、泥ま

みれで仕事をするのが自衛隊員。それが写真の構図。その主人様がここを掘れと言っているのに言うことを聞かない。奴隷のくせに許せないと不平を洩らす被災民」としか読めない。

朝日新聞と共に共同が常々張ってきた自衛隊蔑視キャンペーンはこうした一般記事にも盛られ、ある種サブプリミナル効果として人々の心に浸透させていったように思える。

それが端的に出たのが今回の3・11大震災だ。新聞には毎日、震災死者数と行方不明者の数が載る。死者数は増え、その分不明者が減るのは遺体が新たに発見されるからだ。

だが発見するのかが。被災者の身内ではない。彼等は「外は臭くて」(朝日新聞)とか言っただけな一日避難所に籠ったままだ。

ここも水俣市と同じ。泥沼を、そして逆巻く波の打ち寄せる海岸を捜索してい

るのは自衛隊員で、彼等は2カ月以上休暇なしの連続勤務に耐え、風呂も被災民に譲って汚れた体のまま雑魚寝を続ける。共同の主張は被災地に根付いていた。

自衛隊蔑視論は官僚世界



にも根を張っていた。90年代半ば、ルワンダ内戦で難民が出ると外務省はその救済に自衛隊員派遣を言い立てた。難民キャンプにも武装ゲ

リラが出没する。エイズは流行る。危険千万で、内戦に責任のある西欧諸国も尻ごみしていた。で、米国が安保理常任理事国入りを餌に日本に派遣を要請してきた。

外務省は喜び、派遣部隊に被害が出ればより外交効果があると読んで、装備は小銃のほか機関銃1丁とほとんど丸腰で送り出した。

自衛隊はそんな悪条件、下でも任期を無事務め上げたうえ、武装ゲリラに襲われたNGOの日本人医師の救出もやってのけた。

外務省には期待外れだった。お前らは死ねばいいのに、なに勝手をやるのか。共同も朝日新聞も自国民救出など自衛隊の越権行動だと非難した。

期待に背いたことへの報復は危険だった。任務終了後、帰国には民間機を利用し、その際は制服の着用は仰々しいので認めない。各自私服で帰れと。お前らは目立つことはな

いという意味だ。誰もまじな替えなど持

っていない。年の押し詰まった12月27日、ロンドンから日航機に搭乗したとき周囲の乗客はひどい身なりの集団にちよつと驚いた。

それが異郷の地で頑張り抜いた自衛隊員と知るの機が公海上に出たからの機長アナウンスでだった。

「このたびは任務を終え帰国される自衛隊員の皆さまもお国のために誠に有難うございました。国民になり代わり機長より厚く御礼申し上げます。当機は一路日本に向かつております。皆さま故国でよいお年を迎えられますよう」

異形の集団を包むように客席から拍手が沸き、その輪がやがて機内一杯に広がって行った。

機長は乗客リストを見て自衛隊員の母国を知り「日本人として当然のことをしただけ」と語る。成田に着いたあと65人の隊員はコックピットの見える通路に整列し機長に向かって敬礼した。

被災地はともかく日本人はまだまだ一杯いる。

〈編集部より〉高山正之氏の本誌連載が、待望の文庫化！『変見自在 サダム・フセインは偉かった』(定価420円)、絶賛発売中。

8年前の記事ですが読まれた諸兄も多いかと思えます。特に3段目半ば以降の部分については現役を引退していたにもかかわらず感動し目を潤ませたはずです。

たまたま搭乗した、任務を果たし帰還する隊員に対して、国民を代表して感謝の気持ちを機内アナウンスされた機長とはどういう方なのか、その時は知るすべもなく、その後は記事も含め記憶の彼方に去ってしまいました。しかし、先日、ひよんなことからその方の経歴や人となり、そして空自&我々六九会会員との浅からぬご縁を知ることとなり是非紹介しなければと考えた次第です。

(ひよんなこと：本稿の終わりで紹介)

その方は、元日本航空機長 森 <sup>みつる</sup> 充 殿です。

## 2 森機長とはどういう方？

(ご本人から頂いたご経歴等を引用し紹介します。)

森は、昭和44年10月16日(～翌3月18日)に幹部候補生学校に、第16期民間操縦士訓練生として入校しています。(当時、防衛庁委託学生は春と秋と年2回の振り分けで入校しておりました)第3中隊第7区隊・区隊長大塚1尉、中隊長上村2佐、学生隊長寺村1佐(海兵71期元雷電搭乗員)、副校長開発1佐、学校長美濃部空将補(元海軍芙蓉部隊指揮官)の陣容でありました。大阪万博の頃ですね。

(赤字化は筆者)

……防大剣道部出身の宇都宮候補生の中隊取り締まりの号令を覚えています。また2.26の小雪渦巻く深夜、非常呼集で平城宮址に往復駆け足などがあり(当直幹部森田1尉)、吉野山研修なども楽しい思い出です。また大講堂で映画「バトルオブブリテン」などの上映が解説付きでありました。民操などは一般大学出身の超ズンダラケ組でしたから、もうお恥ずかしい限りで、当時を思うと赤面の至りです。

昭和45年4月6日から、10月31日まで第12飛行教育団で、群司令金子1佐(陸士)、我々民操は第2飛行隊、第1飛行隊は防大出身者、課程終了時の頃の飛行隊長は平塚2佐、群司令原田1佐、ここでやっと我々民操も焼きが入り、「シャキッ!」としたわけです。

教官は航空学生出身の方々ばかりで、防大出身の方は第2飛行隊にはおられなかったと思います。赤鬼、青鬼、ジャに、へびに、首切り左衛門と、名士、達人の世界で、飛行訓練のない雨の日は、起床ラッパの前から、ベッドの中で同期と、喜びのVサインなどを無言で送付しておりました。

あははっ! 今から考えると、非常に良い経験をしたと、

感謝しております。アメリカ映画「愛と青春の旅立ち」ですね。 (防府卒業記念 16機編隊飛行)



パイロットとしての姿勢は、この初期訓練で決まりますから、努力と本気、正気は会社に帰ってからも、退職まで手抜きなしで、続いたと思います。会社でも私の教官は、F86D出身の西村機長、機長養成はF86Fの金田機長、またホノルル便を御一緒した淡野機長(東京五輪のブルーインパルス)の教え他、多くの自衛隊出身の方々に、良き思いでと共に、本当に御世話になっております。あの機長アナウンスは、そういった方々への感謝の思いも込めておりました。

10月10日 森 充 拝

(筆者補足) '47年高松生まれ 69年玉川大卒 日航パイロット訓練生入社

DC-8、B-747操縦士を経て747機長 欧州路線主席 操縦教官 査察操縦士  
米州路線室長 等 要職を歴任 07年定年退職 08年東海大海洋学部航海学科入学  
40日間の国内航海実習を経て12年卒業 同大海洋学部非常勤講師 18年退職  
航空歴38年 総飛行時間16,347時間  
現在：日本危機管理学会会員 孫子経営塾理事 偕行社賛助会員

### 3 機長の行動と想いとは

記事の誕生は偶然の結果だったようです。

機長は、ラバウル・東部ニューギニア戦地慰霊の旅（'09. 8. 15～22）に参加され、そこでたまたまジャーナリストの高山正之氏と一緒になり、航空の今昔の思い出話を語り合う中で、15年前のバルト海上空での出来事を話されたそうです。そして記事が誕生しました。

小生の推測ですが、その話に自衛隊サポーター？の高山氏が感動され記事にされたのではないのでしょうか。

旅の後、機長は高山氏の記事の裏付にとの求めに応じ、出来事の詳細や行動に至った思いをメールされていますので、**本稿の核心**として紹介します。

拝啓

(2009. 11. 5 発)

高山先生、懐かしくも楽しきラバウル行、ありがとうございました。

以下にメールさせていただきます。

多分、1994（平成6年9月21～12月28日）のルワンダ難民救援国際平和協力業務の先遣隊23名・ルワンダ難民救援隊260名・空輸派遣隊118名のしんがり部隊の引き上げではなかったか、と思います。

引率指揮官・松尾2等空佐の名刺にはナイロビインターコンチネンタルホテルの名があり、出張事務所？でありましょうか。

当時の世情は、その前の海上自衛隊の掃海部隊の派遣で、海部総理以下、士を遇するの道も知らず、情けなき仕様かなと思ひ義憤にかられておりました頃で、あまりに自衛隊員が気の毒ではないかと思ひ、勝手に国民になり代わって御挨拶いたしました。公海上空であり、国際慣習にのっとりたまででございます。

自国の軍人に敬意を払うのは、機長・船長の当然の責務であります。

自衛隊を国外に派遣した以上、公人として労をねぎらう挨拶は国民の前、堂々とするべきと思いますが、こそこそと武人に対する礼儀もわきまぬ政治家・官僚に、当時心中怒りを禁じ得ませんでした。

維新このかた、出征兵士の士気を最も高揚させるのは銃後国民の老人の祈り、老婆の御念仏、幼き少年少女の打ち振る日の丸に御座いますれば、今も昔も変わりあるまいと決心した次第でございました。

：自衛隊海外派遣に思うの巻

今を去る9年前、平成6年12月27日、暮れも押し迫った夕闇のロンドン・ヒースロウ国際空港。

出発準備に余念なき操縦室で、ふと目を外に凝らせば、なんと、作業戦闘服らしき自衛隊員とおぼしき若者の陸続と我が機に乗り組みたるを見ゆ。

急ぎCABIN CREWに「そは、なにものぞ？」と問えば「PKOの任務を終え帰国する自衛隊員の方達78名です」という。  
(4ページに続く)



かかる大事の客を預かるを、何故事前にCOCKPITに知らせざるかと心中不満に思えど、予てより機長として期することあり。

機は順調にロンドンを離陸しバルト海の公海上空にさしかかりし頃、一般乗客へのアナウンスに付け加え

「この度はPKOの任務を終え帰国される自衛隊の皆様におかれましては、誠に御国のために有り難うございました。

**国民になり代わり**、機長より篤く御礼申し上げます。当機は一路日本に向かっております。皆様故国でよいお年をお迎えくださいますよう、また今後共訓練にお励みくださいますよう、お元気でご活躍下さい。」とアナウンスを致したところ、1～2分もたたぬうちCABIN CREWがインターフォンで突然呼んでくる。

「何か？」と問えば「あの一、隊長がキャプテンに直接ご挨拶されたいそうです」と言う。

「了解、いつでもいいよ」と申せば直ちに操縦室へ御出になり「隊員一同、大変喜んでおります。ありがとうございました」と言われ当方恐縮致すも、

「ついては我儘な御願ひではありますが、隊員一同に、もしよろしければ操縦室を見せていただけないでしょうか」との申し出でありました。

当時は法的な問題もなくお見せする事はできたのですが、人数がやたら多い。えーい、ままよと思ひ他のクルーに、「御国のためです。いいですね」と念を押し、隊員一同入れ代わり立ち代わり見学に入室してこられました。

ウラル山脈を越えシベリアの真ん中で夜明けを迎え、日本海を渡り天気良好の成田に着陸。降機に先立ちCABIN CREWに言付け致し「これはほんの心ばかりですが、COCKPIT一同からです」とウイスキーのボトル一本を贈りました。

無事業務を終え、税関への通路を歩いていると何時機内で着替えたのか、航空自衛隊の冬季制服制帽に晴れ晴れと着替えた隊長が、ウイスキーの壺を高々と頭上に掲げこちらに激しく敬礼をしてくるではないか！

おおーっと、こちらの四名も慌てて答礼致すを見るや、くるっと向きを変え右手を大きく振りながら、悠然と立ち去って行かれました。隊長M二佐お元気ですか？

あれから15年、自衛隊の海外派遣、新聞テレビでみるにつけ、感慨深くあの時を思い出しております。

御武運心よりお祈り申し、皆さまの御無事の御帰還、お待ちしております。

お元気で！

元 日本航空機長 森 充 記

退官後20年近くが経過した昨今、我々の依って立つ原点等、大事なことを忘れつつあることを、上記のメールに綴られている行動と思ひによって気づかされたように思います。

折も折、北東アジアの安全保障環境の悪化により、「出征兵士の士気を・・・国民の老人の祈り・・・幼き・・・」が求められる事態が、我々の時代よりもはるかに現実味を帯びていると感じます。その緊迫した事態に立ち向かっている自衛隊員の為に、**一老人**として祈り続けたいと思います。

#### 4 終わりに：ひよんなこと

本稿を構成する週刊誌記事やバルト海上空での出来事の詳細は、偕行社下部組織69会役員の柳澤壽昭君（同期・陸）から送信されてきたものです。

機長とご縁が有りそうなつばさ会等の空自関係筋からではなく、縁が無さそうな陸自関係筋から入手したのです。

これが「ひよんなこと」と表現した理由です。

少し詳しく説明しますと・・・。

小生、2，3年前、陸の先輩に懇願？されて偕行社に入会しました。実態は会費を納めるだけの幽霊会員ですが・・・。偕行社では会員を出身期別か何かの基準毎に下部組織の「会」を編成しているようで、小生もその一つの69会に所属しているようです？

69会では関東在住者を対象に、2，3ヶ月ごとに「卓話会」の開催など結構活発に活動しているようです？ 活動の様子は13期HPの陸上要員のサイトを見てください。

（部外者か他人事のように？を付したこと・・・ごめん！！柳澤君）

この9月に「靖国問題」について開催されたようですが？そこに69会に所属の賛助会員の機長も出席されたようです。そしてその場でバルト海上空での出来事の話が出たのでしょうか。後日、機長から記事等が柳沢君にメールされ、感銘を受けた彼が会員に転送したという次第のようです。

以上、ひよんなことでした。

（完）